



長洲所史



舊事記

一 白河の人の住はしめを

麻崎村より糸海道より

道南より入道三人

永暦元年八月九日

移りけしめしをなす

延寶九年一箇と年を

二百二十年に成

安永八毛
去来を

六百十八年に成

長引ハ
往昔 注不渡
注不渡 注不渡
注不渡 注不渡
注不渡 注不渡

農時記

一 又五

其の飯取れまうて
二日ほど作りてを

一 小五

石目し

一 唐芋苗

其の飯取れまうて
十月ほど作りてを

但

むし苗を飯取れまうて
其の飯取れまうて

一 種穀類

八十八粒花一日給ふ

但注揚を八十八粒五日おまじに
かりてを

一 田植

種者は十日給ふ
種てより一但六月の
若く六月給ふに
一とあるに
種て十日めより一但六月の

長洲所史



町章

長洲町民憲章

私たちは、豊かな自然と有明海の恵みに感謝し、
長洲町民であることに誇りをもち、郷土の限りない
繁栄と幸福を願って、この憲章を定めます。

「自然を大切にし、美しい町をつくります。」

「すこやかな家庭を築き、いきいきした町をつくります。」

「教育を重んじ、心豊かな町をつくります。」

「きまりを守り、明るい町をつくります。」

「勤労を尊び、栄える町をつくります。」



庁舎



的 ば か い



金 魚



町 花
(キンギョソウ)



町 木
(クロガネモチ)



50万トンタンカー



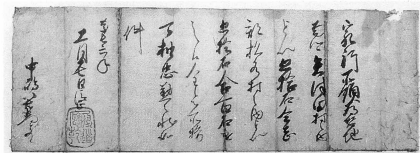
ヒイデン洲土器



ワニグチ (高濱八幡宮)



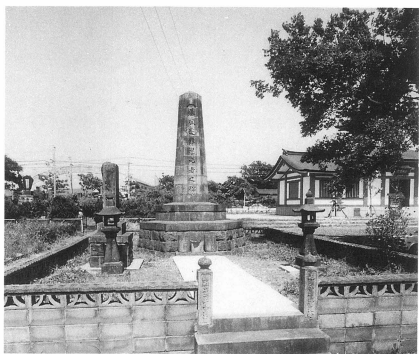
関文書 (町文化財)



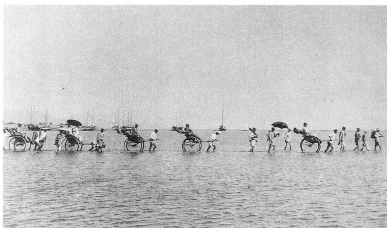
清正の宛状 (正福寺)



眼鏡橋



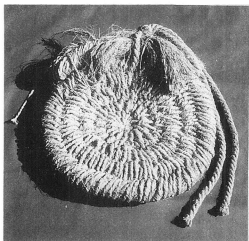
遭難碑



海の中を行く人力車



古 城



的ばかいの的



明治の議事録



発刊のことば

長洲町長 宮田靖次

「夕陽映える有明海……、秀峰雲仙岳……、緑おりなす小岱山……!!」

この美しい自然と豊かな風土にはぐくまれた私たちの愛する郷土「長洲町」は、本年、合併三十周年を迎え、さらに、力強く前進を続けております。

この記念すべき合併三十周年に当たり、「長洲町史」がめでたく発刊の運びとなりましたことを、皆様とともに心から喜びたいと思います。

変貌いちじるしい現代社会は、ややもすれば今日の長洲町の基礎を築いてくれた私たち祖先の偉大な足跡を、おろそかにする傾向もあります。

このような時、郷土の歴史を掘り起こし、先人の労苦に思いを馳せることは、私たちの生き方を考えるうえにおいても、極めて大きな指針を与えてくれるものと確信いたします。

私たちの郷土長洲町には、豊かな歴史が秘められており、また貴重な文化財も決して少なくありません。

これら先人の業績・遺産を大切に保存・保護し、後世に伝えることは、私たち町民の責務であると考えます。この長洲町史編纂事業は、当時の町長中逸光氏の発案により、昭和四十七年十二月より発足し、以来約十五年の歳月に亘り、多くの方々のご協力、ご尽力により推進されてまいりました。そして、本書作成にあたっては、本町在住者あるいは、本町に縁のあるの方々による真の手作りの書として、また次代を担う若者にも親しんでもらえるようにと配慮し、刊行した町史であります。

この町史が、広く愛読され、本町の歴史と文化を少しでも見直す手がかりとなり、私たちの郷土長洲町の美しい自然と社会に対する愛情を、なお一層深める機縁になれば幸いです。

町史の刊行に際し、本務ご多忙の中を献身的、精力的にご尽力いただきました委員、執筆者の方々に深く感謝申し上げますとともに、ご支援、ご協力くださいました町内外の多くの方々に厚く御礼申し上げ、発刊のことばいたします。

まえがき

昭和三十九年（一九六四）に九州井上ゴム化学KKが旧清里小学校跡に誘致され、昭和四〇年代に入ってから、九州不二サッシKK、日立造船KK、その他関連企業が次々に誘致され、郷土長洲町は大きく変貌してきました。この時点で過去をふり返り、郷土の歴史を探索して、私たちの祖先が残した足跡を記録にとどめ、長洲町史の編さんを通して、郷土愛を培うため、本誌の編さんに着手しました。

昭和四十七年（一九七二）一二月に長洲町史編さん委員会が発足し、町史編さんの事務局は教育委員会社会教育課並びに中央公民館が担当しました。編さん委員会は、年に数回開催されていましたが、町長の交替により、会長は中逸光町長から福永一實町長へ、そして、現在の宮田靖次町長へと引き継がれてきました。編さん委員も役職の異動により、若干の変更をしつつ現在にいたり、執筆者も当初より大幅な変更をして、次の人々が執筆を担当しました。

序章 中島 巖（町文化財保護委員）

原始古代 中島 巖（ 〃 ）

〃 故林田 賢（元町文化財保護委員）

古代 福島作蔵（県文化財保護指導委員）

中世 福島作蔵（ 〃 ）

近世 前田哲之助（腹栄中校長）

近代現代 林田幸昌（町教育委員）

神社寺院 越智春一（町文化財保護委員）

民俗 竹本 繁（長洲中教諭）

植物 池田三次（町文化財保護委員長）

原始古代を執筆された林田賢氏と、塩屋眼鏡橋や古庄屋敷等の実測調査をされた県文化課の河北毅氏のお二人が、途中で逝去されたのは、誠に残念なことでした。

執筆を担当した人たちは、素人ばかりで、執筆に当たっては、暑い日や寒い日の現地調査、思うように取り組めなかった地域の悉皆調査、古文書の解読等、たいへんご苦勞をかけましたし、永い間かかって研究された資料等も、おしみなく使つて執筆してもらつたことに深く感謝するものです。

長洲町史は専門家が執筆したものでなく、郷土に生れ、郷土に育ち、郷土に住んでいる人たちによつて書きすめられました。まさに郷土人の愛町心から生まれた書であるところに、他の町史と違った意義があります。

◆ ◆ ◆
本誌の編集にあたり、次の点に留意しました。

- 一、読む人が面白く読めるように、通史を主とし、資料を従として編集する。
- 一、中学生にも読めるように平易な文章で書く。

一、町内に埋れた史料を掘り起し、後世に伝える。

執筆に当っては、いろいろの史料調査に努力してきましたが十分ではなく、書き得なかった分野も多くあったと思います。その点、不十分なことについてはお詫びし、今後の研究に期待したいと思います。

資料調査に当っては、馬場文書・関文書・古庄文書・松尾文書・斉藤文書等の所有者、更には、県立図書館・熊本大学・町内の各神社・寺院をはじめ、多数の方々の御協力に対し、深く感謝いたします。

執筆が軌道に乗ってからは、毎月二回ずつ執筆者を開いて、原稿の検討会を全部の執筆者で行い、足りないところをお互に補足しあって編集を進めていきました。

事務局の社会教育課も積極的に、写真撮影や資料蒐集に盡力してもらいました。

題字は古庄教育委員長にお願ひして書いて戴きました。

ここに町村合併三〇周年という記念すべき年に、本史を発刊できることは何よりの喜びであります。

昭和六二年三月

執筆者代表 林 田 幸 昌

目次

序章 長洲町の概観…………… 1

- 1、位置・面積と人口…………… 1
- 2、地勢・地質…………… 2
- 山・河川・湖沼・平地・海・地質
- 3、気候…………… 5

第一章 原始時代…………… 9

- 第一節 石器時代…………… 9
- 一、石器…………… 9
- 二、骨角器…………… 11
- 三、洞窟の生活…………… 12
- 第二節 縄文時代…………… 13
- 一、縄文時代の生活…………… 13
- 衣・食・住・習俗・貝塚
- 二、玉名・荒尾の縄文遺跡…………… 17
- 古閑原貝塚・若園貝塚・境崎貝塚
- 三、縄文土器…………… 18
- 熊本本の縄文土器

四、長洲町の縄文遺跡…………… 23

第三節 弥生時代…………… 33

- 一、弥生時代の生活…………… 34
 - 稲作のはじまり・農具
 - 二、鉄器の渡来…………… 36
 - 最古の鉄器・小岱山麓の窯跡群・その他の鉄器
 - 三、青銅器の渡来…………… 37
 - 銅銚・銅鐸・貨幣・銅鏡・衣・食・住・弥生時代の埋葬
 - 四、弥生式土器…………… 43
 - 熊本県の弥生式土器の編年
 - 五、長洲町の弥生遺跡…………… 45
- ### 第二章 古 代…………… 55
- 第一節 古墳時代…………… 55
 - 一、古墳時代の生活…………… 55
 - 衣・食・住
 - 二、甕・埴輪・土師器…………… 56
 - 船山古墳・古墳・石人・石馬
 - 三、玉名・荒尾地方の古墳…………… 61
 - 四、古老の話…………… 61

五、景行天皇と腹赤	63
-----------	----

景行天皇・腹赤の賛

第二節 日本と大陸	69
-----------	----

一、記録に残された古代日本	69
---------------	----

二、邪馬台国と卑弥呼	71
------------	----

三、磐井の乱	74
--------	----

四、文化の渡来	75
---------	----

五、隋・唐との国交	75
-----------	----

六、仏教の興隆	77
---------	----

七、陳内廃寺	78
--------	----

第三節 大化の改新	79
-----------	----

一、政治のしくみ	79
----------	----

二、肥後の国司と郡司	81
------------	----

三、班田収授と税制	85
-----------	----

四、白村江の戦	86
---------	----

五、壬申の乱	88
--------	----

第四節 律令政治から武士の世へ	89
-----------------	----

一、律令国家の成立と郷土	89
--------------	----

肥後国の発展・玉名の郡名・郡制と玉名郡

郡司日置氏・玉名八郷・石津郷の郷村

腹赤の賛

二、荘園の成立と郷土	102
------------	-----

律令制度の変質・荘園の成立・玉名地方の荘

園・野原荘の成立・荘園のしくみ・農民の生

活・小岱山麓の窯業・梶取と深田浦

三、荘園鎮守の勧請	117
-----------	-----

荘園鎮守社野原八幡宮・二ノ宮高浜八幡宮・本

地垂迹

四、律令政治の衰退と寺社の建立	123
-----------------	-----

地方の衰微・名石大明神宮・長洲の古大明神

五、武士の起りと郷土	128
------------	-----

武士の起り・肥後の武士団・平氏の全盛・平氏

と肥後・菊池氏と平氏

六、末法思想と郷土	132
-----------	-----

末法思想・樺山賀庭寺の仏像・肥後阿闍梨皇

円・俊仍律師・浄土の信仰

第三章 中世

第一節 鎌倉時代と郷土	139
-------------	-----

一、鎌倉幕府の開設と郷土	139
--------------	-----

鎌倉幕府の開設・幕府の九州対策

斎院次官中原親能・大野別符の地頭大野氏

相良氏の所領・赤崎村と赤崎城

二、野原荘の地頭職……………155

野原荘の地頭・四郎丸資継・荘の中分・蒙古襲来・元寇と住民

三、東郷地方の中世の村……………166

中世の村・名主屋敷

四、荘の支配……………169

東郷の支配・農業の発達・東郷の年貢・西郷の支配・鎮守社の祭礼・祭礼の財源・東郷の祭り・野原風流・西郷の祭り・野原八幡宮祭事簿

五、鎌倉時代後期の郷土……………193

御家人の困窮・祭事をめぐる軋轢・東郷政所の内紛・東郷御家人と在地御家人

第二節 南北朝の動乱と郷土……………200

一、官方・探題方の対立……………200

中興政治と肥後・尊氏九州に下る・小代氏の参戦

二、清源寺の創建と高瀬移転……………206

最古の石造物・清源寺の建立・清源寺の高瀬移転・清源寺の遺領

三、官方・武家方・佐殿方の争い……………211

懷良親王の肥後入国・三派鼎立時代の郷土

四、今川貞世の下向と官方の衰退……………217

守護大名の台頭

征西府の変遷・南北両朝の合体・宝町の明德碑

第三節 室町時代の郷土……………224

一、探題下向に反発する菊池氏……………224

南北朝対立の余塵・戦乱下の東郷米生の合戦・菊池氏の筑後攻め

二、小代氏は菊池氏の国人……………228

筑後守護職・小代兵庫助の戦功・ながす・はらかの古歌

第四節 戦乱の世と郷土……………234

一、大友氏の支配……………234

肥後の戦国時代・筒が嶽城の戦い・小代重忠大友氏に帰属・重忠、武弘戦死・梅尾城の戦い・反大友勢を討つ・小代実忠への行賞・大津山城の戦い

二、龍造寺氏の支配……………246

梅尾城の戦い・菊池城を攻む・焼石金山原の戦い・大野氏の滅亡・四十九池大明神・破格の受賞

三、惣村の発達	254
---------	-----

農民層の台頭・農村の自治・新しい村の成立・東郷地方の寺社と堂宇・郷土の浄土信仰・戦国板碑・伊勢信仰・般若寺の落書・高浜村の伊勢信仰	
---	--

第五節 動乱の終焉	276
-----------	-----

一、動乱の終焉	276
一触即発の高瀬川・隆信肥前有馬に敗死・秀吉の九州征討・戦後処理	

第四章 近世	283
--------	-----

第一節 佐々・加藤時代	283
-------------	-----

一、佐々氏の入国と国衆一揆	283
佐々成政の入国・小代氏の知行・国衆一揆・成政処刑	

二、加藤清正の統治	289
-----------	-----

国衆対策・小代氏の所領	
-------------	--

三、肥後の検地	294
---------	-----

太閤検地・肥後の検地と検地帳・古庄家の検地帳・慶長九年九月の検地帳・慶長十二年の検地帳	
---	--

四、加藤清正の肥後一円支配	307
---------------	-----

関ヶ原の戦いと清正・清正と立花宗茂・古庄屋敷・中島八右衛門の宛行・土木治水事業・清正の宗教政策	
---	--

第二節 細川時代	328
----------	-----

一、細川氏の入国	328
----------	-----

細川氏・細川氏入国直後の人畜改めと検地・藩の中央組織	
----------------------------	--

二、地方支配制度	347
----------	-----

町の支配・郡の支配・手永制度・村の構造・給人と郷士・キリスト教対策	
-----------------------------------	--

三、宝暦の検地帳と長洲	415
-------------	-----

四、土木	450
------	-----

干拓・池・井樋	
---------	--

五、災害	466
------	-----

飢饉・火災・寛政の津波	
-------------	--

六、産業	484
------	-----

漁業・塩・白灰・石炭	
------------	--

七、在町としての長洲町	524
-------------	-----

八、村人の生活	539
---------	-----

九、寺小屋と月田蒙斎	564
------------	-----

第五章 近代……………571

第一節 明治の政治……………571

一、明治維新と政治の変遷……………571

大政奉還・版籍奉還・藩政改革・廃藩置県・郷
 組制・戸籍編制・沖洲村の分村・戸長役場町村
 名……………571

二、長洲町旧町村の概要……………585

町村合併の変遷・明治二二年旧町村の概要

三、地租改正……………593

地租改正の実施・地券・三新法と熊本県政

四、戸長征伐……………597

五、西南の役と長洲……………599

六、地方自治の確立……………599

人民総代・惣代人会談録・町村制の施行

第二節 明治の産業・教育・社会……………631

一、民業……………631

二、農業の変遷……………632

三、漁業の変遷……………636

四、暴風雨遭難事故……………637

五、金魚の養殖……………651

六、製塩業……………653

七、商工業の変遷……………664

八、教育の振興……………666

九、交通・通信の発達……………679

長洲駅・長洲港・道路・長洲郵便局

十、長洲町の治安……………688

長洲町の警察

十一、登記所……………692

十二、明治の社会……………696

第三節 大正時代……………705

一、大正デモクラシーの興隆……………705

二、長洲町の産業……………706

三、米騒動と万田坑の暴動……………712

四、はげしい政争……………717

五、教育文化……………719

六、大正の社会生活……………736

七、腹赤村外三ヶ町水害予防組合……………739

第四節 昭和の前・中期……………742

一、欧州大戦後の経済不況……………742

二、町の産業……………744

農業・漁業・商工業

三、昭和前、中期の社会生活……………	748
町の社会生活・戦時統制の強化・空襲	
四、教育文化……………	756

第六章 現 代……………789

第一節 昭和の後半……………789

一、戦後の混乱……………	789
長洲町に於ける引揚者・復員・遺族会	
二、戦後の地方自治……………	799
三、農地改革進む……………	805
四、腹赤地方の迫間用水利用の経過……………	808
五、長洲町の産業……………	812
六、戦後の教育……………	839
七、新しい文化活動……………	877
八、変動する社会生活……………	880
第二節 新しい長洲町の誕生……………	884
一、町村合併の経過……………	884
二、町村合併後の長洲町の歩み……………	907
三、五〇万トンタンカー建造……………	919
第七章 神社・寺院・その他……………	933

第一節 神社……………	933
総 説	

名石神社・女石神社・十二石神社・高浜八幡宮・四王子神社・洲崎神社・永方神社（一先宮）・梅田菅原神社・折地菅原神社・腹赤菅原神社・清源寺菅原神社・宮崎御祖神社・向野神社・平原神社・赤崎菅原神社・塩屋菅原神社・鷺巢菅原神社・立野菅原神社
稲荷信仰について

折地稲荷神社・大木浦稲荷神社・三崎神社（稲道稲荷社）・遠見神社（清正公社）・金比羅宮（腹赤）・古城宮・宮地嶽神社（駅通り）

第二節 寺院……………	1036
総 説	

阿弥陀寺・安正寺・光正寺・光智寺・西光寺・三宝寺・正福寺・信定寺・清正寺・清台寺・善証寺・長光寺・日感寺・立徳寺

第三節 祠堂……………	1065
長洲地区	
清里地区	
六栄地区	

腹赤地区

第四節 石祠・石像

- 一、長洲地区の石祠・石像……………1087
- 二、清里地区の石祠・石像……………1097
- 三、六栄地区の石祠・石像……………1101
- 四、腹赤地区の石祠・石像……………1106
- 第五節 信仰石造物……………1112

光正寺内の五輪塔地輪・明徳塔・六地藏石幢・
 信定寺の角塔婆・御腰の石板碑・阿弥陀堂の板
 碑・地藏堂の観音板碑・他、葛輪の宝塔・いほ
 石さん板碑・折地天満宮の板碑・ぼたもちさ
 ん・腹赤宝篋印塔・石造仁王像・流死供養塔

第六節 記念碑・頌徳碑・その他碑石……………1128

松尾家碑・古墳改葬碑・暴風雨遭難溺死者之碑
 救援隊遭難碑・安東清人記念碑・新塘復旧紀念
 碑

松崎先生頌徳碑・耕地整理記念碑・満田先生頌
 徳碑

関忠之充の墓・古川弥藤次頌徳碑・岡村とく子
 頌徳碑

耕地整理記念碑・姫ヶ浦の記念碑・一本木記念

碑

宮原喜次郎頌徳碑・石井実彰徳碑

第八章 民俗

第一節 衣・食・住

一、衣

仕事衣・ふだん衣・晴れ着と礼服

二、食

食事、祝祭食品、間食、し好品、つけ物

三、住（民家）

農家・漁師の家

第二節 生産

田の作物・畑の作物・養蚕・田畑の農具・漁撈

第三節 社会生活

民間信仰・農民の労働慣行・漁民の労働慣行

家と家族・若者小屋

第四節 年中行事

正月を迎える行事・正月の行事

春から夏へ向けての行事・お盆の行事

秋から冬への行事

第五節 民俗芸能

民俗芸能

長洲の嫁入り唄・折地のカイカイ人形

梅田の雨乞いおどり

第六節

人の一生

..... 1195

出産と育児・厄年と年祝い・婚姻・葬式と幕制

第七節

長洲むかしのあそび

..... 1206

室内のあそび・外でのあそび・唄

第九章 植 物

..... 1213

第一節

長洲町における植物考

..... 1213

第二節

町木・町花

..... 1225

町木「クロガネモチ」

町花「キンギョソウ」

第三節

長洲町指定天然記念物

..... 1228

梅田天満宮の玉藤

六栄小学校のケヤキ

第四節

みどりの長洲

..... 1231

新山黒松林・防潮堤と防風林

はまごうの群生と黒松林・清里小学校の植樹

「有明の森」と松並木と古大明神の森

第五節

古木・大木

..... 1239

写真資料

むすび

資料 編

町指定文化財

..... 1263

古庄文書

..... 1269

荒尾手永手鑑（山本文書）

..... 1287

馬場文書

..... 1331

年表

..... 1355

序 章

長洲町の概観

1、位置

熊本県の西北部に位置し、西南部は有明海をへだてて、遠くに長崎県の秀峰雲仙岳を望み、北部は小岱山を含む果樹と石炭の荒尾市を経て、福岡県南部の大牟田市へ続き、東は農業と漁業の岱明町を経て歴史と温泉の町玉名市へと続いている。

庁舎の位置は、

北緯三二度五五分三五秒、東径一三〇度二七分二〇秒である。

面積と人口

面積は、一九、二七km²人口は、

昭和六二年五月一日現在で、男子八、九三八人、

長洲町の位置



人口の推移

年 次	世帯数	人 口		
		総 数	男	女
昭和32年	3,245	17,344	8,379	8,965
35	3,231	16,199	7,722	8,477
40	3,264	15,060	7,129	7,931
45	3,403	14,084	6,686	7,398
50	4,044	15,821	7,813	8,008
55	4,773	16,715	8,256	8,459
56	4,841	17,513	8,683	8,830
57	4,933	17,752	8,810	8,942
58	5,013	17,926	8,851	9,075
59	5,133	18,137	8,940	9,197
62	5,265	18,327	8,938	9,389

女子九、三八九人、合計、一八、三二七人で、世帯数は五、二六五戸となっている。

人口の推移を見てみると、昭和三二年にくらべ、世帯数で約二千戸が増加しているにもかかわらず、人口増は千人にすぎないようになっている。

これは、戸籍法の改正によつての核家族化と、世帯内における家族数の減少によるものである。

2、地勢・地質 標高五〇一mの小岱山麓から南及び西へかけてのびる段丘と、行末川・菜切川・浦川の両岸へ広がる平地、それに、加藤・細川の時代に干拓埋立てによつて造成された土地と、戦後に国・県によつて造成された工業地から成り立っている。

山 本町内には前述のように山というものはなく、六栄・腹赤・清里の三地区に最高約三〇mの段丘地帯が北から南へ延びているのみである。

小岱山は、標高五〇一mの筒が嶽、四七三mの観音嶽、二九一mの前嶽を総称したもので、七面山とも呼ばれている。

河川・湖沼 河川はその源を荒尾市及び岱明町の小岱山麓に発しているものが多く、長さ及び流域面積は次の表のとおりである。

河川名	延長	流域面積	区分
浦川	九・一 km	一三・五 km ²	二級河川
嘉永川	二・一八 km	二一・五 km ²	二級河川
菜切川	七・九 km		二級河川
宮崎川	二・八 km	六・五 km ²	二級河川
行末川	五・〇 km	一九・八 km ²	二級河川

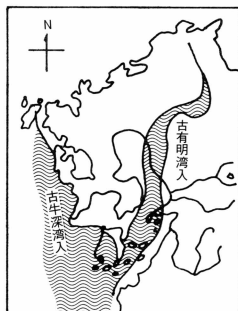
湖沼はほとんど造成された灌概用のもので全域に散在している。

平地 平地は本町の約八〇％を占めてみるとみてよいが、その利用状況は、水田として約四〇％、宅地二七％、その他工業用地等として一三％が使用されている。

海 西南部に面する有明海は、長崎・佐賀・福岡・熊本の四県にまたがる一、六九六 km²の内海で、一般には「有明海」とよばれているが、海図の上では、「島原海湾」とよばれ、奥部を「有明海」とされている。水深五〇 m前後の深さは、天草郡五和町の早崎瀬戸から島原半島ぞいにあり、奥部から筑紫平野・荒尾・長洲にかけては五 mから一〇 mであり遠浅となっている。

干満の差が大きく、長崎海洋気象台の調べによると、三池での平均潮位差は大潮時で五二・二 cm となっており、遠浅のため干潮時には海岸堤防から一・五 kmの干潟ができあがる。

地質 今から約四億年前、古生代のなかごろには、玉名地方も海の底にあり、それから約二億年たった



古第三紀ごろの有明湾入

頃には、たい積した地層の厚さが一万m以上にもなったといわれている。

このように厚くたい積していた地層の深いところでは、大きな圧力と熱のために変質して「変成岩」となり、さらに深いところでは、カコウ岩質のマグマがこれらの地層の間に入りこみ、ゆっくり冷えて固まったのは、約八千年前だといわれている。

約一億年ぐらい前、白亜紀のなかごろに玉名地方は隆起して陸地となった。

カコウ岩の上をおおっていた泥や粘土、砂、さらに変成岩は、雨や風のために浸食され遂に小岱山のカコウ岩が地表に現れた。

小岱山の登山路わきによく見られるつぶの大きな「巨晶カコウ岩」はこのようにしてできたものである。約五千万年前、古第三紀のなかごろになると、日本はほとんどの地域が陸地となり、大森林が茂るようになった。この頃、「古有明湾入」とよばれる図のような深い入江が、天草から荒尾・大牟田・北九州へと続いており、当時陸上に茂っていた森林の植物がたい積して石炭の層ができています。

その後、地かくの変動で、断層や隆起、沈降がおこり約三百万年前ごろからは激しい火山活動によって、金峰山・二ノ岳・三ノ岳が噴火し、伊倉の台地や横島の外平山もその噴出物である「ギョウカイ角レキ岩」

からできている。

約一〇万年前、長洲・岱明・荒尾一带は入江となり、「長洲層」とよばれる地層がたい積した。しかし、地球が寒くなり、氷河期に入ると蒸発した海水が氷河となって海へもどらず海面がさがり、約一万九千年前には現在の海面よりも一三〇mぐらいも低かったと想像されている。

この海退の現象のために、河川の浸食・運搬作用が大きくなり、粒の大きなたい積物を低地まで運び「長洲層」の上に「赤田層」とよばれるレキ層が厚くたい積した。

約四万年前には阿蘇山の大噴火がおこり、多量の火山灰や火山岩塊を四方へ噴出させ、玉名や荒尾・大牟田の低地も埋めつくされてしまった。

その後、氷河期も終わり、海面も上昇して「海進」の現象がおこり現在の海面よりも少し低い程度になった頃の、約一万年前に岱明台地ができたと考えられている。

長洲層と赤田層 「長洲層」と「赤田層」が露出して最もよく観察されるのは、二ノ宮八幡宮から野原交差点へ通じる道路の途中にある「鉄工団地前」バス停から西側へ入ったところの崖に見られる。

次ページの図のように、下から青灰色のねん土層、砂とねん土の層、黄色のねん土層までが「長洲層」であり、その上に大きなレキをふくむ赤田層が厚く重なっている。

（地質の項については、山中正義者「玉名の地質」による）

3、気候

冬季の北風を小岱山によってさえぎられ、対馬暖流が有明海に流れこんでいるために、年の平均気温は一六度という温暖な気候で、冬季の降霜も少ない。県内においても天草地方に次ぐ暖かさであり、

阿蘇地方に比べると平均して約六度の相違がある。

降水量は、県の年間降水量を調べてみると、平地部でおよそ一、八〇〇mmに対して本町では一、四六八mmとなっており、同じ県内で阿蘇山の三、〇〇〇mm以上に比べると半分以下という降水量となっている。

風向は、九月から四月までは北からの風が多く、五月から八月にかけては南よりの風となっており、平均すれば、北よりの風で風速は三mとなっている。

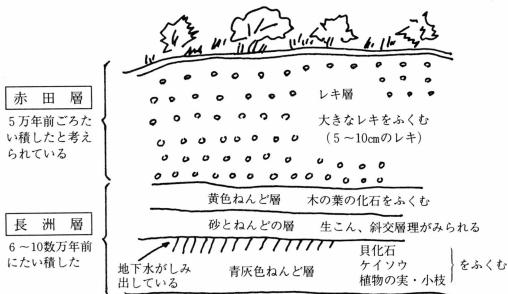
気温（月平均気温 昭和53年～昭和57年）

1月 (度)	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	平均気温
4.7	5.2	9.5	14.4	19.1	23.2	27.0	27.5	24.0	18.4	12.7	6.6	16.0

降雨量（毎月降雨量 昭和53年～昭和57年）

1月 (度)	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	年間雨量
41.7	48.2	87.6	97.0	114.2	245.0	310.7	183.9	127.0	103.3	74.6	35.0	1,468.2

長洲町勢要覧による



「玉名の地質」による

序 章

堆 積 岩 類

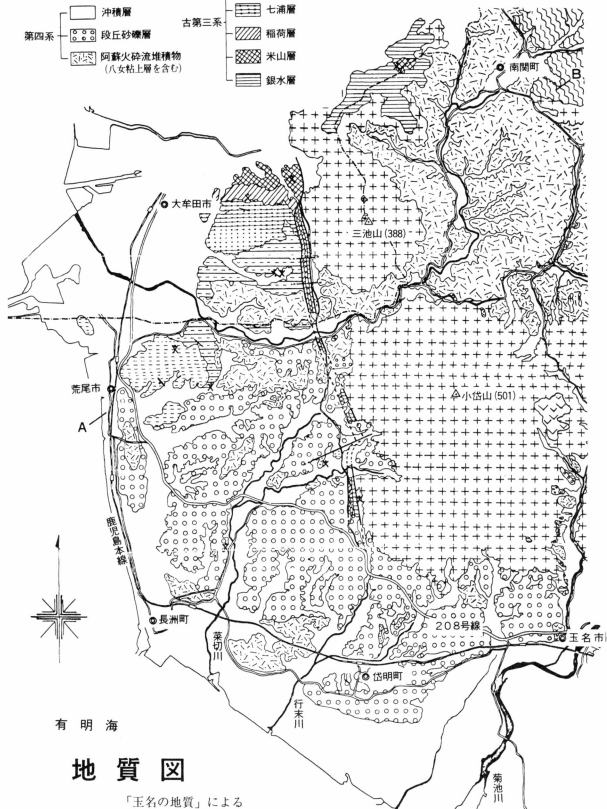
- 第四系
- 沖積層
 - 段丘砂礫層
 - ▲ 阿蘇火砕流堆積物
(八女粘上層を含む)

古第三系

- 四山層
- 勝立層
- 七浦層
- 稲荷層
- 米山層
- 銀水層

火 成 岩

中生界 玉名花崗岩類



有 明 海

地 質 図

「玉名の地質」による

